

西大寺彫刻調査概要

美術工芸研究 全

研究所創立以来、美術工芸研究室は、研究テーマ「南都諸大寺の研究」の一環として、昭和29年の唐招提寺調査の実施を最初として毎年南都諸大寺の調査をつづけてきた。

西大寺については、昭和30年に、総合調査を行ない、36年に絵画調査を、37年に工芸作品の調査を実施した。西大寺の絵画・工芸作品の全貌はこの両度の調査で明らかにされた。そしてその一部は36、37年度年報に既に公表した。

ところで、昭和38年度は、彫刻について調査を実施した。すなわち本堂、愛染堂、四王堂及び収蔵庫に安置されてある仏像の実測調査、写真撮影及び調書作成を完了した。

彫刻の調査点数は38点50軀を数えるが、これらのいくつかは既に重要文化財に指定されている像であり、またそのほかの像でもこれまでに紹介されたものが少くない。しかし西大寺に限らず南都諸大寺の彫刻の多くはその存在こそ確かめられているが、なおその正確な山緒なり造立年代なり、あるいは造形史上の因果関係となると、まだまだ今後の研究に俟たねばならない問題点があつて、いわば研究は漸く緒についた段階にあるといわねばならない。

そこでまず新しく造立年代の明らかになつた像を二、三紹介し、最

後に西大寺の彫刻を概観する意味と、現存像の確認の為に、本年度までに調査した像を目錄風に列挙しておく。もとよりこれらの諸像の中には、既に昭和30年度以降継続している「興正菩薩徽尊の研究」の結果、その正確な山緒や造立年次が確認された像も含まれている。なお西大寺には本坊宝庫に江戸時代の小厨子仏10数軀が蔵されているが、こゝでは一応省略した。

第1図 大黒天像 (大黒天堂)

新たに造立年代の確認された諸像について紹介する。

弥勒菩薩坐像

本像は本堂東脇壇に安置される丈六（実測像高八尺六寸七分）の大像で、像内に鎌倉及び江戸時代の墨書類を確認した。そしてそれらの検討の結果、この像の造立年次と経緯を明らかにできた。詳細はすでに発表したから、それを参照されたい。（註1）

大黒天半跏倚像（第1図）

西大寺には2体の大黒天像があつて、その一体については既に紹介されたことがある。（註2）本像はそれとは別な、現大黒天堂の本尊で、左肩に大きな袋を負い、台に半跏踏下げの姿勢で腰を降した大ぶりの像である。造形手法はおおまかな姿態構成をもつて、いかにも福々しい風貌に造つてあるが、細かに見ればかなりの形式化と簡略化がめだつ。ところで本像の底裏板および頸柄内ぐりに次の墨書が見られる。

〔裏板墨書〕

角寺於地藏院

于時永正元年^{甲子}十一月朔日彫刻刀始

同十二月朔日首尾三十ヶ日造畢

作者南都海竜王寺地藏院住仙算^{（生五十一歳 法三十三夏）}

木寄番匠奈良宿院七郎太郎 生年五十一

勧進比丘西大寺四室住侶宣春房

住持長老高仲大徳通門上人

右無始已来師長父母乃至三界六道流転

衆生同証佛果而已

同十二月一日西大寺仁奉移置也

〔頸柄内部墨書〕

勧進比丘

当寺四室

住侶宣春房

「尊

（種子大日法身真言）

（^レー々、^ノ子野）

（種子金剛界五仏）

（種子光明真言）

永正元年^{甲子}十一月日

海竜王寺

地藏院住

仙算

そしてこれらによつて本像が室町時代の海竜王寺仙算によつて造立されたものであることや、仙算の当時の年齢、臘次、さらに木寄番匠として奈良宿院七郎太郎の名が確認できる。仙算はこれより先、明応七年に白^{（一）}寺の太山王像や司禄像を修理した仏師であるが、本像墨書によつて彼の遺作が新しく確認されたわけで、この期の南都造像史に一資料加えたことになる。

地藏菩薩立像（第2図）

本像は右の大黒天像とともにこれまた仙算の遺作であり、当代の造像活動が知れる好資料である。本像は桧材寄木造りの素木像であるが、

像内から永正十一年造立を明記した次の納入文書類が確認された。

一、地藏菩薩頭部 一箇

本造前後廻き 頭長七寸五分 面長四寸三分 面幅四寸

一、舍利及び舍利奉納書 三十三粒四紙

一、志趣書 一紙

一、結縁者交名 八紙

一、地藏宝号 九紙

一、地藏摺仏 一紙

一、奉加書 一紙

一、その他 六紙

殊に右の志趣書の文末に番匠宿院源四郎の名が確かめられ、仙算はまた本像を含むその大方の造像に当つて常に宿院番匠を従えていることと、本像の造形手法が、この時期以降に名称を替えて頻出する南都宿院仏師の作例と同巧である点が注目される。南都宿院仏師については従来詳しく究明されていないが、本像以後、弘治・永禄・天正と、室町後期の南都で、寄木造り素木像の特異な造形手法をもつて活躍し

たいわゆる俗人仏師である。しかも本像を下限とする「宿院番匠」の自称を「宿院仏師屋」「宿院仏師」「宿院仏所」と変えている過程には看過できない彼等の性格の変化をみることができ、したかつて室町後期の南都仏師における特殊な様式系譜が本像を中心とする西大寺関係の諸像に求められる点で、本像の造像史的意義は大きい。

行基菩薩坐像(第3 4図)

本像は古くは明治32年に旧国宝、そして現在は重要文化財に指定されている像である。^(註3)そして従来これは数少ない行基菩薩像の一体として、造立年代も鎌倉時代に比定されていた。「西大寺大鏡」によれば「(前略)本像は記録上その製作の年代を明らかにしないで、たゞ自作と伝へるけれども、それは天平より遥か下つて鎌倉時代に属すべきもの、肖像彫刻としてその芸術的効果、行信、義淵、鑑真、道

第3・4図 行基菩薩坐像及像底

第2図 地蔵

詮、良弁等に並ぶべくもないが、その制式の簡素又掬すべきものがある」と見える。しかし本像の造形手法を検討すると、大鏡の解説の如く鎌倉時代に相応させることは極めてむづかしい。まず形式的に整えられた彫法は姿態を凡庸なものとし、それは明らかに江戸彫刻の類型的な様式を示す。したがって、例えば唐招提寺藏の旧竹林寺行基菩薩像のような、いわゆる鎌倉彫刻にみられる雄勁な彫法とはかなりの逡庭がある。またそのことは技法的に彩色、寄木の方法においても同様で、到底鎌倉期のそれとは考えられない。彩色は木地の上に反古版経を貼り、その上に施す。亀裂、剝落の部分からは木地が露呈しているが、その木地は像内の素地と同様、江戸彫刻にみられる通有の櫨材の性状である。寄木の構造は本駄にては前後、両肩、膝前矧ぎ、そして最も著しい特徴として近世特有の挿し首の方法が認められる。これら是要するに通有の江戸彫刻の材、構造、様式を示しているもので、そのいずれにおいても鎌倉期的特徴は認め難い。果せるかな、それらを裏づける如く、台座半帖裏には、

南都菅原清涼山

奉再興

享 十五 庚戌年冬十二月 五日

開山行基大菩薩影像

喜光寺住持

小苾芻寂照

の墨書があり、これが行基に縁りの深い菅原喜光寺像で、享保十五年

(一七三〇)に再興されることが知れる。また像底の墨書「喜光寺開山行基大菩薩影像」の筆蹟も右の墨書と同巧であり、さらに現在同寺には本像を納置したものと伝える春日厨子が別にあつて、その朱漆書も

開山影像 享保 五 庚戌年七月十一日
南都菅原喜光寺住持寂照

とあるから、元来、像、台座(半帖)、厨子と一具であつたことが知れる。したがつて本像はこれらが具備された享保十五年中に再興造立されたものとみななければならない。

なお、本像の膝裏には文化六年(一八〇九)正月二日附、菅真賢の願文(包紙入)二紙が貼つてある。

一、文殊開山行基菩薩様

御智加ラをモテ日本国ニなのハシマす

ルクラいの出家ニなりマサルヨ

一光い子加ウ所

文化己巳正月二日 菅真賢(印)

一、三世諸仏様

御智加ラをモテ日本国ニなのハシ

マするクラいの出家ニなりマサルヨ

一光い子加ウ所

文化己巳正月二日 菅真賢(印)

最後に西大寺彫刻調査目録を掲げる。これらによ

つても知れるように、現存する西大寺の彫刻の大きな特色として、創建期の遺像が極めて少ないことや、多くが鎌倉中興期以降の造立になるものであることなどが指摘できる。これは西大寺の沿革を考慮すれば、極めて当然なことであるが、しかしなおそれらの造像史的な性格や因果関係の究明については今後に課せられた問題が少くない。例えば、四王堂四天王像のように、その邪鬼の技法的な問題、またその本牀の造立年代の問題、あるいは鎌倉中興期の善派仏師の問題、さらに室町期の仏師仙算と宿院仏師の関係など、いずれも今後の南都造像史研究に資すべきものである。

一、重文 四天王立像（四王堂）

四軀

持国天 フロンズ 像高六尺八寸七分

増長天 ブロンズ 像高七尺六寸四分

広目天 ブロンズ 像高七尺一寸一分

多聞天 本牀木造、邪鬼ブロンズ 像高八尺九寸

（四軀とも邪鬼は天平草創のものであるが、持国・増長・広目天の本牀は従来の如く果して貞観回祿後の再铸になるものか否かにわかに断定し難い。）

一、重文 宝生如来坐像（聚宝館四仏のうち） 一軀

木造漆箔 像高二尺四寸六分 奈良時代

一、重文 阿彌陀如来坐像（聚宝館四仏のうち） 一軀

木造漆箔 像高二尺四寸八分 奈良時代

一、重文 吉祥天立像（聚宝館） 一軀

木造乾漆 像高六尺五分 平安時代

一、重文 十一面観音菩薩立像（四王堂） 一軀

木造漆箔 像高一丈九尺三寸五分 藤原時代

（正応元年院宣によつて京十一面堂より移安置せるもの（註4））

一、不動明王坐像（聚宝館） 一軀

木造 像高一尺三寸四分 平安時代

一、天部形立像（本坊宝庫） 一軀

木造 像高二尺六寸四分 平安時代

一、地藏菩薩立像（本坊宝庫） 一軀

木造 像高一尺一寸三分 平安時代

一、重文 愛染明王坐像（愛染堂本尊） 一軀

木造彩色 像高一尺四分 鎌倉時代

（像内に宝治元年造立の納入文書がある。仏師善門作（註5））

一、重文 釈迦如来立像（本堂本尊） 一軀

木造素木截金 像高五尺五寸五分 鎌倉時代

（台座に建長元年造立の墨書がある。仏師善慶作）

一、大黒天立像 一軀

木造彩色 像高一尺七寸三分 鎌倉時代

（像内に建長七年跋の大般若理趣分一冊及大黒天平跏像一軀等を納入する。建治二年仏師善存作（註7））

一、重文 興正菩薩般若坐像 一軀

木造彩色 像高一尺九寸五分 鎌倉時代

（像内に弘安三年造立の納入文書がある。仏師善存作（註8））

一、重文 文殊菩薩騎獅像及四侍者像 五軀

木造彩色 文殊菩薩像 二尺七寸五分
獅子高 五尺一寸
善財童子 二尺八寸六分
三藏 三尺四寸六分
優曇王 三尺九寸四分
最勝老人 三尺五寸

（像内に正安四年納入の納入文書がある（註9））

一、弥勒菩薩坐像 一軀

木造漆箔 像高八尺六寸七分 鎌倉時代

一、弥勒菩薩坐像 一軀

（像内に元亨二年の弥勒願文及延宝四年の修理墨書・納入文書がある。（註10））

一、釈迦如来坐像（聚宝館） 一軀

木造彩色 像高二尺三寸

一、多聞天立像（本堂） 一軀

木造彩色 像高三尺三寸八分 鎌倉時代

一、大黒天平跏像（大黒天堂本尊） 一軀

木造彩色 像高一尺九寸 室町時代

一、地藏菩薩立像（聚宝館） 一軀

木造素木 像高三尺五分 室町時代

一、地藏菩薩立像（本堂） 一軀

（像内に永正十一年の納入文書がある。仏師明琳房仙算作（註11））

一、地藏菩薩立像（本堂） 一軀

木造鍍金彩色 像高三尺一寸九分 室町時代

一、四天王立像（愛染堂）

四軀

木造素木

像高 持国二尺一寸一分 增長二尺一寸一分

廣目二尺一寸一分 多聞一尺九寸七分

室町時代

牛 王（聚宝館）

一軀

木造彩色 總長一尺四寸六分

室町時代

一、天部形面部（聚宝館）

一面

木造彩色 總長一尺五寸四分

室町時代

一、如意輪觀音坐像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺六寸

江時代

（像底に南京不退寺の墨書がある。）

一、阿彌陀如來坐像（聚宝館）

一軀

木造漆箔 像高一尺三寸七分

江時代

（台座敷茄子裏に貞享元年の墨書がある。）

一、愛染明王坐像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺八分

江時代

（像内に元禄十四年奥書の金剛峯樓閣一切施伽陀祇徑一卷がある。仏師法橋北川運長作。同寺愛染堂本尊の模刻。）

一、重文 行基菩薩坐像（聚宝館）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸一分

江時代

（台座裏に享保十五年再興の墨書がある。）

一、弘法大師坐像（御霊屋）

一軀

木造彩色 像高六寸九分

江時代

（像底に享保十九年の墨書がある。）

一、興正菩薩敬尊坐像（御霊屋）

一軀

木造彩色 像高五寸七分

江時代

（牀座裏に天明元年の墨書がある。）

一、興正菩薩敬尊坐像（聚宝館）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江時代

（長谷川誠「西大寺奥院地蔵菩薩立像」）

一、慈真和尚信空像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江時代

（長谷川誠「西大寺奥院地蔵菩薩立像」）

一、興正菩薩敬尊坐像（聚宝館）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江時代

木造彩色 像高一尺五寸三分

江戸時代

（本像は愛染堂安置の弘安三年造立敬尊像の模作）

一、不動明王立像（聚宝館）

一軀

木造彩色 像高一尺五寸五分

江戸時代

（台座裏に己酉（寛文九年）三月吉日妙光院高梁の墨書がある。）

一、戒月和尚像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺九寸九分

江戸時代

（像底に喜光寺中興戒月大和尚肖像の墨書がある。）

一、阿彌陀如來坐像（本堂）

一軀

木造漆箔 像高一尺九寸六分

江戸時代

一、阿彌陀如來立像（御霊屋）

一軀

木造漆箔 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、愛染明王坐像（愛染堂）

一軀

木造彩色 像高一尺五分

江戸時代

一、愛染明王坐像（愛染堂）

一軀

木造彩色 像高一尺一寸

江戸時代

一、不動明王立像（愛染堂）

一軀

木造彩色 像高一尺五寸六分

江戸時代

一、不動明王及二童子立像（本堂）

三軀

木造彩色 本尊三尺五分

江戸時代

右 尺七寸三分

左 尺七寸三分

一、毘沙門天立像（愛染堂）

一軀

木造彩色 像高一尺一寸

江戸時代

一、增長天立像（大黒天堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、慈真和尚信空像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、慈真和尚信空像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、慈真和尚信空像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、慈真和尚信空像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸二分

江戸時代

一、弘法大師坐像（本堂）

一軀

木造彩色 像高一尺二寸三分

江戸時代

一、弘法大師坐像（御霊屋）

一軀

木造彩色 像高一尺一寸二分

江戸時代

（長谷川誠）

註

（1）長谷川誠「西大寺本堂弥勒菩薩坐像」（『大和文化研究』第72号）参照

（2）小林剛「西大寺の大黒天像」（『大和文化研究』第45号）、「昭和36年度西大寺調査」（『奈良国立文化財研究所年報一九六二』）参照

（3）文化財保護委員会指定文化財総合目録参照

（4）奈良国立文化財研究所史料第二冊「西大寺敬尊伝記集成」所収「行実年譜」巻下参照

（5）小林剛「西大寺愛染明王坐像」（『国華』第808号所収）参照

（6）小林剛「西大寺釈迦如來像の銘」（『大和文化研究』第8号所収）参照

（7）註（2）参照

（8）小林剛「西大寺敬尊像について」（『仏教芸術』第28号所収）参照

（9）小林剛「西大寺文殊菩薩像々内奉籠物」及「興正菩薩敬尊の文殊信仰とその造像」（『大和文化研究』第4・49号所収）参照

（10）註（1）参照

（11）次掲註（12）参照

（12）長谷川誠「西大寺奥院地蔵菩薩立像」（『大和文化研究』第49号所収）参照